

椎名麟三全集



初期作品

冬樹社

椎名麟三全集22

昭和五十二年十一月三十日初版第一刷発行

著 者―椎名麟三

発行者―高橋直良

発行所―冬樹社 東京都千代田区神田神保町二―一八

電話東京二六四―〇三四六 振替東京八―七七五七

印刷所―三容堂印刷株式会社

製本所―株式会社美成社

装幀者―栃折久美子

© Rinzo Shina 1977

0391-02022-5190

第二十二卷目次

小説

島長の家	5
焰の槍	37
少女と老音楽師	63
男の言葉	89
幸福	149
鞆	157
霊水	167
家	239
第壹号試掘井	269

或る生の記録	301
四	325
小さな種族	343
夜霧	393
吊橋	413
元旦の記	419
霧の旅愁	429
流れの上に	493
境界線上の恋	503
黒い運河	551
評論	
ハンス・グリム「土地なき民」	597

	『新創作』後記	599
	職業について	601
	エルンスト・ベルトラム「ニーチエ」	605
	A・L・ウオリンスキー「カラマーゾフの世界」	607
	ドストエフスキの作品構成についての瞥見	609
	亀井勝一郎「信仰について」	616
	ことばといのち	618
	こおろぎの声	621
	『新創作』編輯後記	623
解 説	船山 馨	627
解 題		631

初期作品

小説

島長の家

1

大学で講義を聴いてゐると、小使が父危篤の電報を持つて来た。海野勝丸は恋人に別れを告げる暇もなく東京を立つた。鹿兒島から定期船に揺られて大島の名瀬に着いたのは三日目の昼過であつた。彼の故郷海野島は名瀬から別に雇つた発動機船で、西へ五時間もかゝる珍らしい習俗を持つた小島である。

勝丸はその島の島長の一人息子であつたので、勝丸が帰郷する時は、名瀬に何時も迎へが来てゐるのであつた。彼は直に其船を見出すことが出来た。船で買物の整理をしてゐた陳平は彼を発見して喜びの声を挙げた。

「若殿様！ 若殿様だ！ 林三！ 若殿様だぞ！」

彼はトランクを持つた儘船に乗移つた。林三は真赤になつて、恥しさに頭を下げ、いそいで発動機の処へ駆けつけて行つた。発動機は激しい震動を船に与へて始動し、船首をグッと左へ向けて走り始めた。船は

忽ち沖へ出た。暖流のむせる様な香がする。

「陳平、父上の様子はどうかんだ？」

「はい、島長様の御病気は何しろ急で御座いまして……若殿様にはお痛はしい儀で御座います」

「なくなられたのか！」

「はい」

「何時だ？」

「今日で四日になります」

彼は眼をつぶつた。予め覚悟はしてゐたものゝ、顔からすつと血の引いて行くのが感じられた。彼はうんと腹に力を入れて、微に眼を開いた。南海の太陽は銀の箭のやうに海面を射て、其処で碎けてぎらぎら散つた。一度東京見物にお呼びし、自分の恋人である飯塚先生の令嬢絹子さんにも会つて戴きたかつたが——と彼は沁々と父の温顔を思ひ出し、古城の様な家に独りになつた淋しさを胸に受け止めてゐた。

海野島が視界に入つて来た。もう夕暮である。周囲三里に足りない小島は忘れられた海の黒子の様に浮んでゐる。近づくにつれて、此の島たゞ一本の太い道路が、浜から真直ぐに彼の家迄伸びてゐるのが見える。其の道路の上を人々の右往左往する姿も見えて来る。此の正月帰つた時は流石の帆見山も色褪せてゐたが、もうすつかり青黝くなつて、城砦のやうな彼の家の後に覆ひかぶさつてゐた。

島に着くと島の五人衆が迎へに来てゐた。此の島特有の矮小な馬が彼に用意されてあつた。若殿様だ！若殿様だ！といふ囁きがあちこちに起つた。五人衆が儀式用のきらびやかな陣羽織を着て丁寧に彼へ挨拶をした。彼は夢中で挨拶を返し、馬に乗つて走つて行つた。颯が屢々其の前を横切つた。火山岩で全島覆はれてゐる此の島は、家は勿論道迄坦々と石で舗装されてあつた。かつかつ馬の蹄が鳴つた。

代々彼の家の下僕である爺と爺の娘のおしまが彼の家の橋の処に待つてゐた。橋の下には彼の家を取り囲んでゐる堀が奇麗な水をたゝえてゐる。其の水に影を映して物々しい石垣が堀に沿つて走つてゐた。

彼が門への橋まで来ると、爺が飛んで来て彼の足に縋りながら、わつと泣き出した。おしまが黙然と佇立してゐた。顔には昂奮の色を漂はせてゐる。彼が前を過ぎると丁寧に頭を下げた。

彼は馬を降りて広い玄關を走り抜けた。石畳が時ならぬ激しい音を立てた。広間にはもう香華の香が一杯たちこめてゐて、正面に白木の寝棺が安置してあつた。花以外に供物もない質素さである。広間の石畳の上に、ぎざを敷いてゐた二、三人の島の人々は、彼の姿に慌てゝお辞儀をして姿を消した。

棺を見ながら今初めて現実に直面した者の様に、彼は力が抜けて坐り込んでしまつた。

爺が彼の手を持ちそへて、棺の処まで連れて行つた。そして蠟燭に火をつけた。

「島長さま！ 若殿様で御座います！」

と声を頼はせて話しかけ、そして急に声を低めて恰も死んだ島長に聞かれるのを恐れるやうに、

「若殿様、お顔をお拝み遊されて！」

と彼に囁いた。

彼は恐る恐る寝棺の蓋を持上げた。アルコオルと屍臭がぐんと鼻を打つた。あつ！ と顔をそむけて彼は手を離れた。小さな音を立てゝ蓋が落ちた。その煽りを受けて蠟燭がゆらゆらいだ。

得体の知れない影が彼の頭の中を掠めた。彼は再び恐る恐る蓋を持上げた。蠟燭の火にはつきり見えた首筋に残つてゐる紫紅色の斑点！

蓋を置いて爺の顔を見た。爺は黙つて頷いた。二人は庭に面した部屋に来て堅い椅子に腰を下した。

「爺！ 医者はい？」

「迎へませんでした。……島長様は夕食后お部屋で何か探し物を遊されてゐた様子で御座いましたが、急に呻き声が聞えますので、おしまと飛んで行つて見ますと、もう医者なんかは間に合ひさうも御座いませんでした。……たゞ一言勝丸にこの家を守れと云へと仰つただけで、後はうわ言の様に今死ぬのは残念だと繰り返しておいになりました」

「夕飯に何を召し上がられた？」

「はい、粟で造つた濁酒とバナナを三本ばかり……で心当りもないので御座います」

「食事は部屋でとられたのだな」

「はい」

「爺、毒死だよ」

「わしもそれに気が付きました。島の女が昔から堕胎こほうしに使つてゐる毒水仙の根で御座いますよ、きつと……爺が不注意で申訳ございません」

「爺に心当たりがないのか？」

「はい、それが……若殿様わこでん、仇を討つまで何卒わしの命を預けて下さりませ」

「誰もお前に死ねと云つてはゐないよ」

彼は吐き出す様に云つた。

島では葬式は夜行はれる――

海神うみじんお導き下され

山神やまじんお導き下され

海野島三七戸人口一六七人が総出で島長の葬列に加つた。彼の家から帆見山の麓つたひに、島の北部にあ

る墓地迄送つて行くのであつた。先頭の二名に二本のたいまつが許されるだけで、人々は暗い上に火山弾のごろごろしてゐる悪い道を歩んで行つた。蝙蝠が驚いて時々バタバタ彼等の頭に降つて来た。

人々は闇に負けるのを恐れるやうに叫び交した。

海神うみかみお導き下され

山神やまかみお導き下され

墓地には島の五人衆が、もんの様な袴に陣羽織を着て穴を掘つてゐた。かぶり火が赤々と燃えて、陣羽織の金銀の刺繍が夢の国の星のやうに、ちらりちらりと輝いてゐた。島の屈強な若者が、四人で白木の棺のまゝ昇いで来た。勝丸は矢張り陣羽織を着て其の後に随つてゐた。

群衆は墓地の垣の外に止つた。棺を昇いだ四人の男と爺と彼とが五人衆に近付いた。

棺を五人衆が受取つて穴に下した。五人衆の皆木が数珠を、多田が花束を彼に捧げた。彼は数珠の緒を切つて棺に投げた。パラパラ棺に当るかな音がした。彼はその音に、意識がすつと遠く引いて行くのが感じられた。

「お花を！」

荒々しく多田が彼の肘をついた。ふと我に返つて彼は花を棺の上に投げた。棺を昇いで来た四人の若者が急いで土をかぶせ始めた。

2

門の処で、おしまが誰かと喧嘩してゐる。葬式から間もない一日。

「黙つて何ぢや！ 黙つて門に這入るとは無礼な奴ぢや！」

とおしまが怒鳴つてゐる。二階の部屋の窓から見ると訪ねて来た多田と争つてゐるのだ。十八になる此の娘は、すうりとした姿態を持ちながら、其の筋肉は引締つて、野性的な硬さを持つてゐた。腕なんかは磨き上げられた棒のやうに強靱な美しさである。

「案内乞うたに、お前が聞えないのぢや」

と多田も赤くなつてゐる。

「馬鹿にされるな！ 妾の耳はな、こゝに居ても帆見山の池の水を飲みに来る兎の足音も、ぢやんと分るんぢや！」

「いゝ耳ぢや、だがいくらいゝ耳でも嫁入道具にはならんて！」

「何を！ つべこべ！」

おしまは多田の胸倉をとつた。爺が何処からか飛んで来て引分けた。

勝丸は階上の部屋で多田を引見した。其処からは海岸が見える。檳榔樹が二本、其の部屋の窓に沿つて、よきによき空高く伸びてゐた。葉は其の先端に放射形に垂れ下つてゐる。夜見ると、髪をざんばりにした、長い長いろくろ首の様に不気味だつた。

多田は腰を下すと、獣皮の草履を履いた足をきちんと揃へた。其の草履は彼の富有さを示してゐた。

多田は顎を引いて石のテーブル越しに勝丸を盗み見、それから懷から一通の書類を出した。

「金壹万円也

右発動機船六隻分購入代金として海野島々民に寄附申候也、尚右金額は本年七月十五日以内に五人衆に交付候也

昭和十一年五月三日

海野島々長

海野義丸

「これは何だ？ 三日と云へば父が死ぬ五日前ぢやないか！」

「はい」多田は頭を下げた。「此の証文は五人衆の皆木と神名が、島長様に御無理を云ひまして頂いたもので御座います」

「うん、それで？」

「はい、一応若殿様にお見せして置かなければならないと存じまして」と書類を懷にしまひながら、「御不幸早々、こんな事を申し上げるのは島の者の道に外れて居りますことは、百も存じて居りますので御座います」

と立上つた。

階段の降り口迄見送つた勝丸に、多田は再び深い敬礼をして、坊主頭を振り／＼階下へ消えて行つた。

城砦の様な彼の家の夜は、物凄く淋しい。内地で見られる畳の間は彼の家はおろか島のどの家にもなかつた。間数が二十近くある彼の家の、人気の絶えた部屋に、兎もすれば蝙蝠が果喰ひ勝だつた。

勝丸は父の居間に沈み込んだ。一万円もの金が無処にあるのだらう。此の家の財産として、墓地の下の一町歩ばかりの栗畑と帆見山と数隻の発動機船に過ぎないではないか。それなのにどうして父はあの証文を書いたのだらう。何を目当にしたのだらう？

「爺！」

彼は叫んだ。声が石の壁に反響してグアンと鳴つた。途端にドアが開いた。おい、が木の皮の鉢巻をして